

**D ブレーン背景におけるスケール不変性と AdS/CFT 対応**  
**Scale invariance in D-brane background and AdS/CFT correspondence**

○高橋裕希<sup>1</sup>, 三輪光嗣<sup>2</sup>

\*Hiroki Takahashi<sup>1</sup>, Akitsugu Miwa<sup>2</sup>

Abstract: We review [1] and [2]. In a D-brane background spacetime, there exists a scale invariance under an anisotropic scale transformation. Transformation properties of boundaries of a worldsheet and the free energy of a string in the case of N D3-branes are studied in [1]. In [2], they consider D p-branes for background and generalized the results of [1] for  $p \neq 3$ .

1. はじめに

ゲージ理論と重力理論の間の双対性, いわゆる AdS/CFT 対応が提案されてから様々な具体例や応用が研究されてきた. 典型的な例として,  $AdS_5 \times S^5$  における IIB 型超重力理論と 4次元の  $N = 4$  超対称ヤン・ミルズ (SYM) 理論の双対関係があるが, このような対応がどの範囲で, またどのようにして起こるのかは未解明である.

[1] では, 非等方的なスケール変換

$$x^\mu \rightarrow cx^\mu, \quad y^I \rightarrow c^{-1}y^I, \quad (1)$$

に対する IIB 型超重力理論の解および境界状態  $|B\rangle$  の不変性,  $X^i, P^i, \alpha_n^i, S_n^a$  などの変換性を用いて弦の自由エネルギーのスケール変換性を調べ, これが D3 ブレーンの近傍の領域でスケール不変であることが示されている. ここで  $x$  は D ブレーンの伸びている方向,  $y$  は D ブレーンの局在している方向の座標である. 尚この先単にスケール変換といった場合は [1] にならない (1) のことを指すものとする.

2. D3 ブレーン背景時空計量のスケール不変性

$N$  枚の D3 ブレーンが存在する場合の IIB 超重力理論の解は

$$ds^2 = \left(1 + \frac{4\pi\lambda}{y^4}\right)^{-\frac{1}{2}} \eta_{\mu\nu} dx^\mu dx^\nu + \left(1 + \frac{4\pi\lambda}{y^4}\right)^{\frac{1}{2}} dy^I dy^I, \quad (2)$$

である. ここで  $\lambda = g_s N$ ,  $g_s$  は弦の結合定数である. この解は  $y^4 \ll \lambda$  となる領域 (near-horizon region と

呼ぶ) において変換 (1) の下で不変である. [1] においては, スケール変換をすることで, 図 1 に示すように  $N = 4$  SYM の Wilson ループと超重力理論の最小曲面が関連すると主張されている.

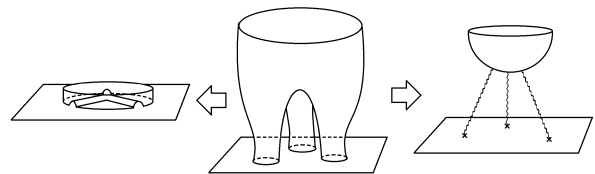


図 1 Images based on [1].  $N = 4$  SYM (left) and minimal surface of type IIB supergravity (right) are related via the transformation (1).

3. 境界状態のスケール不変性と作用の変換

世界面の境界状態を特徴づける方程式は D ブレーンの伸びている方向のガンマ行列の積を  $\beta^\pm$  として

$$(Q + \beta^\pm \tilde{Q})_\alpha |B\rangle = 0, \quad (3)$$

と書ける (詳細は [3]). [1] では  $\beta^\pm = \gamma^1 \gamma^2 \gamma^3 \gamma^4$  として議論されている. 以降保存する超電荷を  $(Q + \beta^\pm \tilde{Q})_\alpha = Q_\alpha$  のように書く. ここで,

$$|B\rangle = \exp \left[ \sum_{n=1}^{\infty} \left( \frac{1}{n} M^{ij} \alpha_{-n}^i \tilde{\alpha}_{-n}^j - i M^{ab} S_{-n}^a \tilde{S}_{-n}^b \right) \right] |B_0\rangle, \quad (4)$$

$|B_0\rangle$  は境界条件を満たす各モードの基底状態の直積であり,  $M^{ab}, M^{ij}$  はそれぞれ

$$M^{ab} = (\gamma^1 \gamma^2 \gamma^3 \gamma^4)^{ab}, \quad M^{ij} = \begin{bmatrix} -I_4 & 0 \\ 0 & I_4 \end{bmatrix}, \quad (5)$$

1 : 日大理工・院 (前)・物理 2 : 日大理工・教員・物理

のように定義されている。[1]では、世界面上でのスケール変換を正準変換として実現している。

$$\delta_\epsilon X^i(\sigma) = \epsilon M^{ij} X^j(\sigma), \delta_\epsilon P^i(\sigma) = -\epsilon M^{ij} P^j(\sigma). \quad (6)$$

$X^i, P^i$  の  $\tau = 0$  におけるモード展開および  $Q$  と  $S_n^a$ ,  $\tilde{S}_n^a$  の関係,  $Q$  と  $\alpha_n^i, \tilde{\alpha}_n^i$  の交換関係など (詳しくは [4] を参照) から

$$\delta_\epsilon \alpha_n^i = -\epsilon M^{ij} \tilde{\alpha}_{-n}^j, \delta_\epsilon \tilde{\alpha}_n^i = -\epsilon M^{ij} \alpha_{-n}^j, \quad (7)$$

$$\delta_\epsilon S_n^a = i\epsilon M^{ab} \tilde{S}_{-n}^b, \delta_\epsilon \tilde{S}_n^a = -i\epsilon M^{ab} S_{-n}^b, \quad (8)$$

が導かれ, これによって境界状態  $|B\rangle$  のスケール不変性が示されている。また光円錐ゲージにおける IIB 型超弦理論の作用

$$S = -\frac{1}{\pi} \int d^2\sigma \left[ \frac{1}{2} \partial_\alpha X^i \partial^\alpha X^i - i S^a \partial_- S^a - i \tilde{S}^a \partial_+ \tilde{S}^a \right] \quad (9)$$

の変換性は以下ようになる。

$$\delta_\epsilon S = \frac{\epsilon}{\pi} \int d^2\sigma [-M^{ij} \partial_\alpha X^i \partial^\alpha X^j + M^{ab} S^a \partial_\sigma \tilde{S}^b]. \quad (10)$$

#### 4. 自由エネルギーの変換性

[1]において, 自由エネルギーは以下のように定義されている。

$$F(\lambda) = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{F_n}{n!} \lambda^n \quad (11)$$

ここで,  $F_n$  は  $n$  個の境界を持つ世界面の寄与である。 $F(\lambda)$  の変換性は各  $F_n$  の変換性によって決まり,  $\delta_\epsilon S$  が  $|B_0\rangle$  の挿入に置き換えられるという考察から, 微小スケール変換による自由エネルギーの変化は

$$\begin{aligned} \delta_\epsilon F(\lambda) &\sim \epsilon y^4 C(\lambda, y) \sum_{n=0}^{\infty} \frac{\lambda^n}{n!} F_{n+1} \\ &= \epsilon y^4 C(\lambda, y) \partial_\lambda F(\lambda) \end{aligned} \quad (12)$$

のようになると推定している。つまり, 自由エネルギーは

$$F(\lambda) \rightarrow F(\lambda + \epsilon y^4 C(\lambda, y)) \quad (13)$$

と変換され, near-horizon region において  $F(\lambda)$  が不変であるということが示唆される。

#### 5. Dp ブレーンへの拡張

[2]では, [1]の結果を一般の Dp ブレーンの場合に拡張している。計量はホライゾンの半径  $U_0$  を用いて以下のように書ける。

$$\begin{aligned} ds^2 &= \left( \frac{U^{7-p}}{d_p \lambda} \right)^{\frac{1}{2}} \left[ \left( 1 - \left( \frac{U_0}{U} \right)^{7-p} \right) dx_{p+1}^2 + \sum_{a=1}^p dx_a^2 \right] \\ &\quad + \left( \frac{d_p \lambda}{U^{7-p}} \right)^{\frac{1}{2}} \left[ \frac{dU^2}{1 - \left( \frac{U_0}{U} \right)^{7-p}} + U^2 d\Omega_{8-p}^2 \right] \end{aligned} \quad (14)$$

ただし  $d_p$  は  $p$  によって定まる定数である。これは以下の一般化されたスケール変換

$$x_A \rightarrow c^{-1} x_A, U \rightarrow cU, \lambda \rightarrow c^{3-p} \lambda \quad (15)$$

の下で不変である。 $X^i, P^i, \alpha_n^i, S_n^a$  などについては [1] と同様の変換性が成り立つ。自由エネルギーについては [1] と多少異なった取り扱いがなされているが, 結果としては near-horizon region において変化が無視できるという結論が得られている。

#### 6. まとめ

AdS/CFT 対応がどのように生ずるのかを, スケール変換に対する変換性の観点から調べた [1] および, それを拡張した [2] の内容について調べ, レビューした。今後もさらに AdS/CFT 対応が発生する原理やゲージ理論と重力理論の関係について調べ, 考察していきたい。

#### 参考文献

- [1] H. Kawai, T. Suyama : "AdS/CFT correspondence as a consequence of scale invariance", Nucl. Phys. B, Vol.789, 209-224, 2008.
- [2] T. Azeyanagi, M. Hanada, H. Kawai, Y. Matsuo : "Worldsheet analysis of gauge/gravity dualities", Nucl. Phys. B, Vol. 816, 278-292, 2009.
- [3] 太田信義 : 「超弦理論・ブレイン・M 理論」, 丸善出版, 2012.
- [4] M. B. Green, J. H. Schwarz and E. Witten : "Superstring Theory", Cambridge University Press, 1987.